

事例研究法による母子関係の研究 (2)

田畑 洋子

Case Studies of the Mother-Child Relationship, (Part 2)

Hiroko TABATA

問題と目的

カウンセリングや遊戯療法など心理療法の面接の経過において、母子関係が話題になったり、遊びの中で表現されたりすることが多い。そこで“母親と子どもの関係がセラピストとの関係に支えられて時間を追って変化し、その変化が子どもの問題の改善を促すだろう”という問題意識のもとに、先号(田畑・望月、1998)において、心理学関連の専門誌に発表されている事例研究の中から、母子関係に関する考察がされている論文を検索して、形式的側面からの分析を行った。その結果は以下の3点に要約された。①最も多く扱われている事例は児童期であり、技法としては箱庭や描画も含む遊戯療法が使われている。面接の形態は母親との並行面接を行う場合が多い。②中・高生においては面接形態・方法共に多様になってくる。子どもから大人への移行期である思春期の特徴を表わしていると考えられる。③大学生・成人の比率もかなり高くなっており、母子関係の問題が成人にまで持ち越されて症状として顕在化することを示している。

本論においては、上記の論文について内容面からの検討を加えて、子どもの各発達段階における母子関係修復過程の特徴を見出すことを目的とする。

方法

心理学関連の専門誌計13誌に発表されている事例研究の中から、母子関係について考察がされている論文(含研究報告)を検索する。期間は1987年から1996年までの10年間とする。検索された計45論文のうち、代表的と考えられる論文について概観する。

結果と考察

1. 乳幼児期における母子関係修復過程

乳幼児期の子どもは親の保護の下で過ごし、その心の世界は親、特に母親の心の在りようの影響を色濃く受けている。子どもの発達課題達成のためには母親の側の“親になる”課題すなわち“世話”の力の獲得が先決となってくる。乳児の場合は「育児困難」を訴えての母親の来談となることが多い。

深津・小此木・濱田(1993)は「育児困難を訴える母親」12例を病理水準から「母親としての不適応」、「神経症人格構造」、「境界人格構造」の3群に分けて、母親の精神力動とその治療について検討している。3群に共通することとして「母親像、ひいては母性的なものに対す

る陰性感情が顕著なこと」や「自分の見捨てられ体験が顕在化」することがみられるとする。また、境界例水準においては特に「虐待する親は虐待された子どもである」ということや「三者関係をもつことの困難さ」が出現する。このような母親の特徴を念頭におきながら治療を進めるのであるが、母子相互作用の観点から「母-乳幼児治療」が提案されている。

濱田(1993)は境界パーソナリティー構造の母親K子への母子治療の例を報告している。K子は母親の世代から伝えられた子殺し空想を持ち、抑鬱状態となっていた。K子は先ず入院治療により心の中の「乳児」を世話されて母親機能の回復がはかられて後、母子治療に移っている。濱田は治療者として日常生活に関する助言のような現実的な支持から、母子交流の解釈を行う心理的な面の援助に至る重層的な役割を果たしたという。ここでも病理が子どもに伝達することを防止し、子どもの健康な発達を保証するという母子治療の利点があげられている。

中藪(1995)と小牟田(1996)は母親への精神分析治療の事例を示して、出産と育児のプロセスが母親の乳幼児期における原初的体験を呼び起こすが、その癒しが適切に行われるならば、傷つきの世代間伝達をくい止め、母親または家族の新たな出発点になりうることを示している。

母親への適応プロセスを発達心理学の立場から追及したのが氏家・高濱(1994)である。氏家らは3人の母親の子どもの誕生後の苦悩とその解消プロセスを2年間にわたって追跡し、面接調査の記述分析を行っている。親になるプロセスの個性的側面を記述した上で、共通のパターンを探るというアプローチである。問題解消のプロセスで、夫や子どもとの相互性や親密性が高まることが示されている。また、そのプロセスは「世話」の獲得という成人期の発達を示すとしている。極めて多様な条件が錯綜している子育てのプロセスにおいて共通項を見い出していく困難さはあるが、女性のライフサイクルにおける子育ての位置付けを考えていく上でも必要な研究だと考えられる。

幼児期に至り、母親との分離が可能になると、子どもへの遊戯療法により子どもの成長を促すことも出来るようになる。鈴木(1996)は円形脱毛症の4歳女兒Rが遊戯療法をうけることにより、母親との二者関係を形成していった経過を報告している。Rは神経質な父親と強迫的な母親の下で子どもらしい世界を生きることが出来なかった。特に1歳半で経験した強迫的な断乳はRにとって生きるエネルギーの中断と感じられたと思われる。Rは遊びのなかでエネルギーを取り入れて、安全基地を作ることが出来ると、徐々に退行していった。実生活においても母親に甘え直す体験をすることが出来て、成長への足がかりが得られた。鈴木は、Rのこの成長を支えたのは遊びの中で体験できたセラピストとの共生的な関係の体験だったと考察している。

以上の文献から乳幼児期における母子関係修復過程の特徴は次のように要約されるだろう。

乳幼児期においては特に、母親のその母との内的関係が子どもとの関係の在り方に影響を与える。したがって、子どもとの現実的な関係修復に先だって、母親の母子関係修復が必要である。その修復はカウンセラーとの間で信頼・安心出来る関係を体験することにより可能になる。また、母子の現実的・外的な関係修復もカウンセラーやセラピストとの関係の体験を支えとして促進されると考えられる。

2. 学童期における母子関係修復過程

学童期は母子双方に働きかけるため、子どもには箱庭や描画を含む遊戯療法を行い、母親にはカウンセリングをおこなう並行面接の形態をとることが多い。母子の変化が相互関連をもって現われる時期である。事例研究として母子双方の面接経過を取り上げているのは、三木・深

津（1994）である。三木らは登校拒否の小3女兒の母子関係について、母娘両者がお互いの不満を代弁しあう共生関係にあり、共に父親を悪者にすることで葛藤を否認していたと分析している。母子双方が「怖い母親像」を治療者や父、あるいは夫に投影するという「双子のような病理」をもっていたと述べている。

小林（1995）は母親面接のみを行い、母を通してA子に働きかけ、母の心の中の（母自身の）母娘関係に働きかけている。その結果心の中の母娘関係の変化が現実の母娘関係の変化をもたらした経過について考察している。その際、母親とカウンセラーの間にはイメージとしての子どもが内在するとしている。母親の面接のみでも母子の関係が変化し、子どもの問題解決にもなる一例である。

弘中（1988）は登校拒否女兒の母親面接をとりあげ、「母性の犠牲とその取り戻し」の観点から考察を加えている。田畑（1993）は同じ事例の遊戯療法過程を提示して、子どもの側から同じテーマで考察している。子どもが思春期の入り口に差し掛かったのを契機にそれまで封印されていた問題が家族全体を動かすことになった事例である。母子双方への働きかけにより、夫婦関係の変化と子どもの成長が促進されて、症状の改善がみられた。弘中がいうように、家族全体の布置的状况を安全に守ることに専念し、家族関係の変化が起こってくるための「舞台・容器になる」のが治療者の役割であると考えられる。

学童期には乳幼児期の問題の解決と前思春期課題の乗り越えという二つの課題の達成が必要である。前者の課題達成については箱庭を中心とする遊戯療法での事例が挙げられる。

荒川（1988）の提示する小2女兒の事例は「偽成熟性としての背伸び的独立傾向」の子どもと「母性的共感の乏しい母」の組み合わせであり、菅（1991）の提示する小1女兒の事例は「心を満たしてくれるような情緒的一体感を望む」子どもと「微妙なところで共感性の乏しさが目につくタイプ」の母親との葛藤である。両事例は同種の問題を含む母子関係と考えられるが、両者とも箱庭や描画の表現を行う中で、母性とのつながりを体験して、自我を支える基盤を補強し、学童として家から外の世界に出ていく準備をしている。荒川の事例では骨折の世話をうけるなど、現実的な母親のケアも体験出来ている。年齢が低いだけに母親の現実的レベルでの変化は子どもにとって不可欠なことではあるが、菅がいうように現代社会における母性の変容の問題もあり、母親の力を期待出来ないことも多い。「心理療法の中でこの（母親との）一体感を象徴的集約的な形で体験させることが援助となる」といえよう。

田中（1988）の提示する小3男児は箱庭の表現において、「呑み込む母」から「養う母」へと母親イメージを変容させ、実際の生活においても母への反抗と甘えが受け入れられる。その安心感を基盤にして仲間と遊ぶ楽しさを感じるようになっている。

淀（1995）の提示する小2男児はさらに原始的なレベルである母親との融合状態から始まり、母親と戦い、自らの足で立つ基盤を得る過程を箱庭作品に示している。自我の誕生という乳児期における課題がここで達成されたといえよう。言語レベルでは困難な作業であり、イメージ表現の重要性が示されている。

学童期後半の前思春期においては、それまで持ち越されてきた母親との問題を解決して、母子関係から離脱し、仲間関係の参入へと動き出すのが課題である。

本城（1989）らは9歳女兒・摂食障害の治療過程をMahler, M. S. (1975)の分離-個体化過程の理論と対応させている。共生的関係を再構築しようとする第Ⅰ期から始まり、母親に対する拒絶としがみつきを繰り返す再接近危機期の第Ⅱ期を経て、対象恒常性が確立する第Ⅲ期に至るとする。いわば育て直しといえるが、カウンセラーの方にこのような理解があれば母親を支え

ることもより容易になると考えられる。

安藤(1990)は箱庭表現を通して、子どもがポジティブな母親像を見出し、親密な仲間関係を形成していった経過について、武井ら(1993)は描画や遊戯に母親への内在化された攻撃性の発散を行い、仲間関係へと出ていった事例の経過を述べている。

子どもの母親からの分離をすすめるために、母親自身の個体化への援助の必要性について言及しているのが上別府(1996)である。上別府は子どもの前思春期危機の時期に母親に生じる自分らしさの獲得過程に注目し、これを「母親の個体化」といつている。また、強迫性障害の小4女兒と中1男児の症例について、両者とも母親が自分自身の母親との和解をなして、母親の側からの境界線形成、適当な距離、共感性の発動などを含む個体化の達成を行った経過を提示している。

橋本(1996)も母親の「個」が誕生し、子どもの成長を願う母性が発動するようになった例を挙げている。橋本は母子並行面接において子どもの自立が母親の自立を促す過程を検討し、移行対象の現象について検討している。すなわち子どもが移行対象の役割を果たさなくなると、母親の心に空虚が生じ、新たな移行対象を求める。そのひとつとして、治療者が選ばれ、治療者との間で二者の融合関係を体験することで、空虚が癒され、自立の方向に向かっている。橋本は母親役割の維持を助けるのが移行対象であるとし、治療者と治療室の役割もそこにあるとしている。提示されているのは母親自身の病理性も深い事例であり、母親になる前の段階である「個」の誕生がなされた例である。健康な水準の母親についても移行対象の観点から母子関係を考察すると興味深いと考えられる。

子どもの発達課題遂行を促進するためには母親自身の発達課題達成が必要であることは以上みてきたとおりである。母親自身の課題を考えようとすると、生育歴、とりわけその母親との関係が問題となってくる。

母親自身の母親との関係に触れているのは安藤(前出)、上別府(前出)、小林(1995)、平松(1989)、三木ら(前出)である。安藤は母親は「親」になること、祖母は「家のなかの役割を委譲すること」など、家全体の変化の中で、子どもの成長が促進されたことを述べている。平松も2世代にわたる母娘の関係回復の過程を提示している。このように考えると、子どもの問題はさまざまな布置の一つとして起こってくると捉えて、家族全体の在り方を考える広い視野が必要になってくるだろう。

以上の文献から、学童期の特徴は母子の相互関連的な変化が顕著にみられることである。子どもは遊戯療法等の心理療法をうけることにより、イメージの世界で内的な母親像を変化させてくる。母親もカウンセリングを受けることにより、内的な子どもイメージの変化とともに、子どもとの外的な変化も起こり、子どもの母イメージの改善がさらに促進される。その際、母親の病理性によってはその生育歴を整理し、母親自身の個体化をはかることが先決になることもあるだろう。

3. 中・高校生(思春期)における母子関係修復過程

学童期において“親から仲間関係へ”という課題が達成されると、本格的な分離-個体化の時期を迎えることになる。“境界例”や“摂食障害”等の病理をもつ事例も多くなり、本人面接を主としながら、父母面接や合同面接が取り入れられている。

中・高生の事例では本人が来談しない場合も多い。中山(1994)は母親面接の6年間の経過を分析して「来所しないケースとどのような援助的関わりをもっていくか、クライアントが治

療的に使用出来る親をいかに差し出していくか」(p.14)という観点から考察を行っている。不登校のA子の治療は母親面接から始まり、A子は自宅において母親を相手に動物人形を使ったプレイを始めた。プレイの様子はメモにしてカウンセラーに渡されており、カウンセラーに抱えられた「容れ物」(Winnicott, 1965)の中での母子のプレイであるという理解がされている。その後、母親自身の治療面接に移行した。母親の両親が隣に転居してくるという出来事が起こり、母親とその母親との間で、これまでの母子関係を検証する作業が始り、母親は「世代を超えて流れる投影同一視の機制を洞察し、真の自己を見出し出していった」(p.24)。母親面接の枠を超えた母親自身の面接であり、母親は自己を統合する作業をしながら、A子に対しては治療者の役割をとり続けたと考えられる。それを可能にしたのは、治療者が一貫して母親に関わり、A子を抱える母親を抱え続けたことであるとしている。子どもは母親に、母親は治療者に、治療者はスーパーバイザーにそれぞれが抱えられた所で起こった変容として興味深い事例である。

面接のテーマの多くは“母親からの独立と父親の登場”である。上地(1991)の“思春期危機型鬱病”の事例では、本人の面接経過を検討して、古い母親像からの脱却と父親像の修正の経過が示されている。クライアントは幼児的母親像へのアンビバレントな固着を示していたが、母親に対する否定的感情を語り、母親の不安の強さや過干渉を批判した。父に対する気持にも母親からの取り入れがあることに気付き始め、母親の理想化から醒め始めた。上地は、母親との葛藤および見捨てられ不安を解決することと、幼児期的母親像から脱却する過程では肯定的父親像の支えが重要であることを示した。

描画や箱庭、夢の表現を通しての分析も行われている。橋本(1995)は夜尿の事例A子に箱庭療法を行い、「母なる世界からの自立と私の誕生」の物語を提示した。“おねしょ”が母子に共有された秘密であり、それをめぐっての交流がA子にとって母との貴重な接触のチャンネルだったと考えられた。また、母親自身、幼い時に母を亡くしており、自分の感情を漏らしても抱えられることのない環境ですごしてきている。A子の他者への不信感は母のそれであったと考えられる。

西村(1992)は中1女兒の箱庭作品を「母から祖母へと養育者の交代があった幼児期に戻り、森の中をさまよいながら、心的エネルギーをたくわえ、母親からの自立にむけて、自分自身の再発見の旅をした過程」(p.73)と捉えている。

奈良(1991)も箱庭に「火と水」と「空と大地」を置き、「母なるもの」と「父なるもの」を自己の内に位置付けた中2男児(登校拒否)の事例をあげている。

竹松(1994)はチックの中1男児Yの事例をあげて、描画と夢を「母からの独立」の過程として分析している。夢には否定的母親像が直接的に表現され、その後内的な女性像は母親のみでなく、異性にも対象を広げ始めた。次の段階では男性世界や父との関係が主題となってくる。描画には老賢人らしき男性や斧・紋章などが描かれた。現実においては、父親が姿を見せた途端、父母の不和や父親の女性問題が表面化して離婚に至ってしまう。思春期の子どもの問題はまさに中年期にある両親の夫婦関係を揺さぶらずにはおかないといえるだろう。

井村(1995)は家庭裁判所における“非行”の女子少年2例から、夫婦間の葛藤と非行との関連を考えている。事例J子においては父母との三角関係の葛藤の中で非行化していたので、母親機能が回復するように働きかけたが、急速に夫婦連合が強化されたことで、J子が疎外される状況を引き起こしてしまった。また、井村は父子関係の葛藤に言及し、父の愛情確認の必要性を述べている。O子の事例では父と生別しているため、エディパルな葛藤を祖父母との間で形成しており、母の抑えていた願望をO子がネガティブな形で表現したと考えられた。母

が実家の葛藤から適度な心理的距離を保ち、O子をその葛藤から自由にするために感情の整理が必要だったと捉えている。母親の母性性を健全に保つための援助について、母の自我同一性が健全に保たれることおよびその背景として配偶者の在り方が問題になるとしている。

中年期にある母親自身の女性性や分離-個体化を問題としているのは小林(1989)、藤井・上地(1992)である。

小林(1989)は摂食障害の母娘への並行治療からの考察をしている。母親はその母親に同一化して女性性を獲得することが出来なかったため、男根羨望や性的同一性の問題が存在していた。結婚後は夫や娘への依存が起これ、娘との間に密着した関係を形成していた。摂食障害の母娘関係にみられる“娘の母親からの分離不安”は母の側に“娘に対する分離不安”があるといい、「母親の女性性獲得の在り方についても考察をひろげると、摂食障害の患者への理解を促し、治療を効果的に進めうる」(p.111)としている。小林は、母が結婚-出産-育児の過程のみでは女性性の確立に至っていないとすれば、如何にして女性性を確立するのかという女性性獲得をめぐる時代的変遷にも言及している。これは個を超えた時代の問題として課題となってくると思われる。

藤井・上地(1992)は息子が非行化傾向を示している中年期の母親に時間制限心理療法(12回)を適用し、その有効性を考察している。母親は息子への過保護や思い入れに気づき、母子癒着関係を改善しようと試み、子離れへの思いを語り、「第3の分離-個体化」を達成していつている。過度の退行を防ぎ、母親の現実適応を援助するという点では、母親面接に取り入れていける方法であると考えられるが、「来談者の選択の必要性や面接が限定された目標と内容になること、過度の教育的・操作的面接になることなどの問題点」もあり、その適用には限界があるだろう。

母子関係の問題が主要な課題とされている現代において、父親を中心とする家族内力動をもつ家族構造の変化の実態に迫ろうとしたのが牛島(1990)である。“登校しぶり”の14歳女子、“神経性食欲不振”の17歳女子、“境界例”の24歳男子の3事例をあげている。いずれも父親を否定したり、排除して母子連合が形成されている様相が示され、父の存在感が薄くなる背景に“母親と実父との結び付き”が強いことを指摘している。母親が、実母との関係より実父との関係について語ることは臨床的にも経験するところである。思春期・青年期における自立にむけての援助では父親あるいは父性は看過出来ない問題である。

摂食障害の特殊な母子関係を修復する過程を述べたのは今井(1993)、鈴木・川谷(1993)、館(1991)である。

今井は母親への援助方法として、“基本的安心感”とともに“肯定的な育む父性”の2面性が必要なことを述べている。

鈴木らは摂食障害の17歳女子高校生と母親の同席面接の経過を述べて、母親のmourning workが果たした治療的役割について考察している。母親は失った実父母への思いを患者の養育の中で満足しようとして、夫を排除した家族状況を作っていたが、自分の生い立ちを回想し、mourning workを行ったことが転回点となり、その後、夫の参加を得て、症状の改善に至っている。治療者の役割としては、母子間の感情交流を保証し、父権を復活させるきっかけを提供したこととしている。

館は18歳の摂食障害の患者の治療経過を呈示し、Winnicott, D. W. (1965)の情緒発達論の視点から自己の病理と母子関係の病理について考察を加えている。母親の問題として、子どもの必要性に対する感受性・想像力の欠如(環境としての母親の機能不全)があり、子どもは母

親の世話役として、偽りの自己による偽りの適応をせざるを得なかった。治療者としては、攻撃性など子どもの投影するものを受け止め、成長する過程を見守ることが出来る母親（環境としての母親）の役割をとることが重要であると論じている。

最後に10例の複数事例を扱っているのが長尾（1987）である。登校拒否中・高生の母親の性格特性と治療的展開との関連を考察している。面接上の態度をもとにして母親の性格を4類型に分類し、合同面接、母親のみ面接、並行面接の各場面構成における治療の展開との関連が述べられている。

以上の文献に示されるように、中・高生の年代は親との分離-個体化がテーマになることが多い。親も中年期危機の時期を迎えるため、子どもの問題は親自身の分離-個体化の問題や夫婦関係の問題を触発して、家族全体の変容を促すことになる。母子双方への本格的な心理療法により、母子の成長が促進されれば、双方の分離-個体化が達成されて自立的な関係へと変容する。母子の分離を助けるための父親あるいは父性の力の重要性も示されている。

4. 大学生・成人（青年期）における母子関係修復過程

青年期は思春期に引き続き、親からの分離-個体化をすすめて、自我同一性を確かなものにしていく時期である。検索された事例ではすべてが“境界例”や“摂食障害”など重篤な病理を持つ者であり、本人の内的世界に焦点を当てる本格的な心理療法がなされている。また、クライアントはすべて女性であるので、女性特有の母子関係が浮き彫りになっている。

境界例女性への治療経過を提示しているのは服部（1992）、水俣（1993）、巽（1990）である。いずれも内的な母子分離を経て統合的な自己像を獲得していく経過が示されている。服部の事例ではK子の治療の開始までに既に2年間の両親面接がもたれていた。母親自身が母性剥奪の生育史をもち、その対象関係のあり方は境界例と考えられるものであり、K子との間では「二重拘束的」な母子関係を形成していた。K子は母の過去を理解することで母を自分と同じ弱い「ひとりの女」として受け入れ、許そうとする。両親との過去の体験を弔う「喪の体験」がなされ、大学生として出立していつている。

水俣のK子の事例では、その母に見捨てられ体験があり、それが母側の分離不安を強固にしていた。K子は世話役の子どもを演じることで適応しようとしていた。母拘束から解き放たれようとする、世話役としてのアイデンティティを失うジレンマに陥いる。この家族病理に改善をもたらしたのは良い父親イメージの体験であるとしている。

巽もまた、母からの分離を促す父親機能の重要性に触れている。クライアントの「母なるもの、父なるものを求めての叫びは、母なるもの、父なるものの目覚めをも促すものである」（p. 127）というように、青年期の問題は母子関係に留まらず家族全体の病理を顕在化させて、その変化をも求めてやまないといえるだろう。

牛島（1987）は神経性無食欲症の2例をあげて、共通にみられる治療経過を次のように纏めている。「拒食と母親との戦い」を治療の導入期とし、次に「過食と母子の一体感」の時期、「父親の登場による核家族の形成」の時期、最後に子どもは子どもの世界に入り「同性同年輩の対象の追求」の時期になるとする。ここでは祖母-母-娘ではなくて、祖父-母-娘の軸が提唱されて父親の役割が重視されているのが興味深い。

小寺（1995）は過食症の女性の面接経過と夢の分析から、女性の心理的発達に関する論を展開している。彼はNeumann, E. (1953)の考えを援用して「侵略的な男性像を女性が受容し、それが肯定的で親和的な男性像に変容していく中で、女性は強固な母娘関係を脱し、次の段階

へと展開していくものと考えられる」(p.64)と述べている。

いずれの事例でも、母親の代における母性剥奪や見捨てられ体験がその娘との適切な関係を阻害しており、その母子の密着関係を切るものとしての父親あるいは男性の力の重要性が示されている。親との分離が果たされた後に、あるいは関連しながら自己像の統合がなされるが、その際、性的な面も含めての統合になるのが思春期とは異なる点である。

“母親として”来談したクライアントについては子どもの年代で分類しているため、成人期のクライアントの事例は2例である。1例はイギリス人男性という特異な例である(鈴木、1989)。もう1例は「心身の不調」を主訴とする37歳の女性の例であり、精神分析の観点からの考察がされている(市田、1993)。

両例とも自分の子どもを持つまでに至っていないので、本論の目的である母子関係が次の世代にどのように伝達されるかということは示し得ない。彼らは幼少時の母性剥奪から受けた心の傷を癒すための人生を生きているともいえ、初期母子関係の影響の重大さを改めて感じさせられる。

青年・成人期に至るまで、母子関係の問題を遷延させている場合、その病理は境界例や摂食障害などのように重篤となる傾向がある。外的・現実的な母子関係修復は困難になるが、本格的な心理療法により、子どもが母との心理的分離を果たして、母から引き継いだ母性剥奪や見捨てられ不安の影響を脱していつている。思春期におけると同様、父親像や男性像の重要性も示されている。

要 約

心理学関連の専門誌13誌(1987年～1996年)に発表された事例研究の中から母子関係について考察がされている論文を検索した。検索された45論文について内容面から分析をした結果、以下の点が明らかになった。

1. いずれの年代においても、子どもの問題解決を考える過程において母親の側の問題が顕現してくることがみられる。3世代に亘る問題が露呈されることもあり、世代間伝達の様相が示されている。

2. 面接で扱われるテーマとしては分離-個体化の問題として要約することができる。母親の分離-個体化が子どもが親から自立して、自己を確立していくことを促進していつている。また、思春期以降においては父親の力が必要になることも示されている。

3. 治療者の役割としては、母親と子どもの外的・内的な関係を視野に入れるに留まらずに家族の歴史までを考慮する視点を持つことが必要である。

また、乳幼児期においては母子関係を直接に取り扱う母子治療を使ったり、母親への直接的なアプローチが困難な場合には夢や箱庭等の表現により内的イメージの変容をはかったりなど、各年代において、また各事例においての適切な方法をとることが要請されてくる。

4. 子どもの各年代の特徴は以下の通りである。

乳幼児期においては、母親のその母との内的関係の修復により、現実の子どもとの関係が改善される。学童期においては母子双方が心理療法を受けることにより内的な成長を遂げ、互いの内的イメージを変化させる。現実的・外的な関係の変化も可能である。思春期・青年期においては、外的関係の変化は困難になる。母子双方が分離の課題を達成することにより、その内的関係を変化させると考えられる。

なお、今後の課題は自験例の面接過程を詳しく検討し、上記の仮説を検証していくことおよ

び母子関係修復過程のモデル図を提示することである。

引用・参考文献

- 安藤嘉朗 1990：家イメージを中心に展開した神経症少女の箱庭療法過程。箱庭療法学研究, 3(2), 68-78.
- 荒川由美子 1988：抜毛癖を呈した一少女の箱庭療法過程。箱庭療法学研究, 1(1), 38-46.
- 藤井 弘・上地安昭 1992：中年期危機の母親に対する時間制限心理療法。カウンセリング研究, 25(2), 68-76.
- 深津千賀子・小此木啓吾・濱田庸子 1993：育児困難を訴える母親の診断と治療—精神力動の特徴と病理—。精神分析研究, 36(5), 66-79.
- 濱田庸子 1993：境界パーソナリティ構造の母親の子殺し空想と自殺企図—乳幼児を持つ母親の精神療法と母子治療—。精神分析研究, 36(5), 80-88.
- 橋本やよい 1995：箱庭の物語が「生きられる」ようになるまで—ある思春期心身症少女の箱庭—。箱庭療法学研究, 8(2), 3-14.
- 橋本やよい 1996：母親の移行対象論—体感から分離へ—。心理臨床学研究, 13(4), 365-376.
- 橋本やよい 1998：母親面接の Narrative について—語られた子どもの「複合的な意味作用」—。心理臨床学研究, 15(6), 623-633.
- 服部孝子 1992：境界例の女性との心理療法過程。心理臨床学研究, 10(1), 17-28.
- 平松清志 1989：場面緘黙児の母親面接。心理臨床学研究, 7(2), 52-59.
- 弘中正美 1988：ピーターパンの母親探し—ある登校拒否女兒の母親面接過程—。心理臨床ケース研究, 6, 3-22.
- 本城秀次・観音林恵子 1989：9歳で摂食障害を呈した女兒症例について—Anorexia Nervosa および児童期の Depression の視点から—。児童精神医学とその近接領域, 30(4), 49-60.
- 市田 勝 1993：「怖い母」と「嫌な父」のイメージを解消していった一女性例。精神分析研究, 37(2), 41-46.
- 今井皖式 1993：拒食症の娘をもつ母親の援助—思いやることができるまで—。心理臨床学研究, 11(1), 25-35.
- 井村たかね 1995：夫婦間および親子間の葛藤と女子少年の非行。心理臨床学研究, 13(2), 157-168.
- 上別府圭子 1996：母親の個体化 (individuation) と前思春期の発達—年少型強迫性障害症例の治療を通して—。児童精神医学とその近接領域, 37(4), 27-42.
- 上地雄一郎 1991：思春期危機を契機に発症した抑うつに対する精神分析的な心理療法の一例。心理臨床学研究, 8(3), 29-41.
- 小林弘子 1995：内なる母娘関係の変容—抜毛を呈した女兒の母親との面接過程—。心理臨床学研究, 13(2), 180-190.
- 小林 和 1989：心身症母娘にみられた女性性獲得をめぐる問題。精神分析研究, 33(2), 33-42.
- 小寺隆史 1995：女性の心理的発達に関する一試論—過食症症例の面接過程と夢の分析を通じて—。思春期青年期精神医学, 5(1), 63-76.
- Mahler, M. S. 1975: *The Psychological Birth of the Human Infant*. Basic Books inc. New York 高橋雅士・織田正美・浜畑 紀訳 1981：乳幼児の心理的誕生—母子共生と個性化—。黎明書房。
- 三木 都・深津千賀子 1994：登校拒否から来院拒否へ—小学校3年生女兒の遊戯療法と並行母親面接から—。心理臨床学研究, 12(3), 217-228.
- 水俣健一 1993：境界例治療における攻撃性の背後にあるもの。精神分析研究, 37(5), 33-40.
- 長尾 博 1987：登校拒否を示す青年を持つ母親の性格特性と母子の治療的展開との関連。カウンセリング

- グ研究, 20(1), 1-10.
- 中山美智子 1994: 思春期不登校 A 子 6 年間の治療的過程—母親面接を通して見た A 子-母親プレイの展開—. 心理臨床学研究, 12(1), 14-26.
- 中藪久美子 1995: 母親の喪失—幼児虐待の一症例から—. 精神分析研究, 39(5), 39-44.
- 奈良英子 1991: 登校拒否中学生への箱庭療法. 箱庭療法学研究, 4(1), 38-47.
- Neumann, E 1953: *Zur Psychologie des Weiblichen* Rascher & Cie, AG., Zurich 松代洋一・鎌田輝男訳
1980: 女性の深層. 紀伊國屋書店.
- 西村善文 1992: 身体症状を示す登校拒否女児への箱庭療法過程. 箱庭療法学研究, 5(1), 62-73.
- 小牟田豊美 1996: 赤ちゃんにより死の恐怖を呼び起こされた母親の一症例. 精神分析研究, 40(1), 33-38.
- 菅 佐和子 1991: 母性とのかわりという視点からみた心因性視覚障害児の箱庭療法. 箱庭療法学研究, 4(2), 24-36.
- 鈴木真弓 1996: 遊戯療法過程による心的外傷としての分離体験への効果に関する一考察—円形脱毛症女児の事例を通して—. 心理臨床学研究, 13(4), 390-402.
- 鈴木 龍 1989: 親密さへの願望と脱出への強迫—人生半ばに達した「永遠の少年」*puer aeternus* の一事例—. 心理臨床学研究, 7(1), 45-56.
- 鈴木智美・川谷大治 1993: 摂食障害例における母親の *mourning work* が果たした治療的役割—母子同席面接を通して—. 精神療法, 19(5), 47-55.
- 田畑洋子 1993: 心理療法過程における母子関係の変化(2)—学童期の事例—. 名古屋女子大学紀要 人文・社会編, 39, 77-89.
- 田畑洋子・望月久乃 1998: 事例研究法による母子関係の研究. 名古屋女子大学紀要 人文・社会編, 44, 143-156.
- 館 直彦 1991: 摂食障害における自己の病理と母子関係の病理をめぐって— Winnicott の情緒発達の視点から—. 思春期青年期精神医学, 1(2), 157-168.
- 武井 明他 1993: 11 歳女児のトリコチロマニアの治療過程について. 児童青年精神医学とその近接領域, 34(2), 14-21.
- 竹松志乃 1994: チック・強迫症状を呈した中学生男子の事例—チック症者の“仮面性”について—. 心理臨床学研究, 12(3), 229-240.
- 田中信一 1988: 箱庭を通して自分だけの世界から外の世界へ向かっていった少年—母親イメージの変容—. 心理臨床ケース研究, 6, 117-131.
- 巽 信夫 1990: 一女性境界例患者に対する自立に向けての援助—分離・個別化課題達成を軸に—. 精神療法, 16(2), 17-24.
- 氏家達夫・高濱裕子 1994: 3 人の母親—その適応過程についての追跡的研究—. 発達心理学研究, 5(2), 123-136.
- 牛島定信 1987: 神経性無食欲症にみるかぐや姫コンプレックス. 精神療法, 13(3), 48-58.
- 牛島定信 1990: 思春期症例にみる両親像と現実の夫婦関係. 精神分析研究, 34(1), 37-44.
- Winnicott, D. W. 1958: *Transitional Objects and Transitional Phenomena. In Through Paediatrics to Psycho-Analysis* London: Hogarth Institute of Psycho-Analysis. 北山 修監訳 1990: 移行対象と移行現象—児童分析から精神分析へ—. 岩崎学術出版社, 105-126.
- Winnicott, D. W 1965: *The Maturation Process and Facilitating Environment* Hogarth Press, London 牛島定信訳 1977: 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社.
- 淀 直子 1995: 太母からの少年の自立. 心理臨床, 8(2), 117-125.